
ゼロのつかいま

glare sign

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロのつかいま

【Nコード】

N9525T

【作者名】

glare sign

【あらすじ】

ゼロの使い魔でルクセンブルク家の少女がいろいろ頑張るかもしれないお話。

ぷろろーぐ

「今日から魔法学院か、一緒にがんばりましょうね！エリーゼ！」

「そうね、ルイズ。あなたも魔法が使えるようにがんばりなさいよ？」

今日はトリステイン王国の魔法学院の入学式。今日から三年間私達が学ぶ校舎が目に入り、意気込む私より背の低い桃色の髪の子。彼女はルイズ。ルイズ・フランソワーズ・ルブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン王国のヴァリエール公爵家の三女である。

私達は幼い頃からの知り合いで、八歳からヴァリエール公爵家にお世話になっているため、学院に入学する今まで一緒に暮らしていた。なので、私にとってルイズは数少ない心を許せる友人の一人である。

「う、うるさいわね！エリーゼ！そのことについては触れないでよ！」

そう、彼女は貴族でありながら魔法が使えないのだ。

ここハルケギニアという世界では貴族、平民の格差が大きい。なぜなら、貴族は魔法と言う強力な力をもっているからだ。

この世界の常識では、貴族は魔法が使える。そして、魔法の腕が良いとそれだけで一目おかれるのだ。

だけれど、魔法が使えない貴族と言うのは、逆に舐められてしまうのだ。

「ごめんなさい、ルイズ。でも、悪気があった訳ではないのよ？」

「いいわよエリーゼ。でも私はこの三年間で絶対に魔法が使えるようになってやるわ！そして立派な貴族になるの！お父様やお母様のように・・・」

彼女の家は公爵。貴族というのは上から公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵、となっていて、公爵というのはその血筋に王家の血を持つ者だけに与えられる貴族としての最上位。そんな名を冠する彼女の両親はトリステイン一の貴族なのである。

魔法の腕も父は火のスクウェアメイジ、母は風のスクウェアメイジとして優秀な腕をもっている。

そのため魔法が使えないルイズはその事に大きなコンプレックスを抱えている。

「私は知っているわ、ルイズ。あなたは人一倍がんばってきた事を。だから大丈夫、きっと使えるわよ、魔法。」

「ありがとう、エリーゼ。せめて、せめてドットメイジでもいいの。魔法さえ使えればそれだけで立派な貴族になれるのよ！」

魔法と言うのは火・水・風・土、そして失われた属性、虚無を含めた五属性からなっている。

魔法が使える者をメイジと言い、貴族は全員メイジである。

それでも魔法の腕にはレベルがあり、属性を一つだけ使えるメイジをドットメイジ。二つ使える者はライン、三つでトライアングル、そして最上位、四つの属性を使える者をスクウェアと言い、大抵のメイジはドットかライン。トライアングル以上の者は珍しいのだ。

「それは違うわ、ルイズ。魔法が使えるだけでは立派な貴族にはな

れないわ。トライアングルでもスクウェアでも立派とは言えない貴族もたくさんいるもの。私はそれを良く知っているわ。」

「ご、ごめんなさいエリーゼ！そんなつもりで言ったわけではないのよ！」

「大丈夫よルイズ。さあ、もうすぐ学院よ。準備しなくてもいいの？」

「大丈夫よ！さあ、行くわよ！魔法学院！待ってなさい！」

そうして私達を乗せた馬車がゆっくりと魔法学院へ向かって行く。
ああ、楽しい学院生活になればいいのだけれど。そんな私の願いと共に。

魔法学院に入学し、初めての授業。

「みなさん、私がこの魔法学院で火の授業を見る事になる、ジャン・コルベールです。これからよろしくお願いしますね。」

入ってきたのは、ジャン・コルベールと言う頭頂部の寂しい男性だった。

「では、みなさん。いきなり授業というのはいささか無粋なので、まずは自己紹介からはじめましょうか。」

どうやら初めての授業では各々自己紹介をするようだった。貴族の自己紹介など、長そうで退屈そうだけれど、聞いておいて損はないだろう。そう思い耳を傾ける。

そうして、見知ったルイズや、グラモン、モンモランシ、グランドブレなどのトリステイン貴族に、ゲルマニアで有名なツェルプストー家の令嬢など、外国の貴族などが自己紹介をしていく。

「では、次に君、お願いしますね。」

コルベール先生が次に指名したのは小柄で眼鏡をかけた少女。

「タバサ。・・・よろしく。」

タバサと名乗った少女はそれだけ呟くと、席に座ってしまった。

「おい君！君はどここの家の者なんだ？家名くらい名乗ったらどうだ

！それとも君には名乗る家名もない下賤な親を持っているのかね？」

彼女はタバサとだけ名乗った。家名を言わずに。

家名というのは貴族が大切にする物、まあ所謂「誇り」というものだろう。それを名乗らない少女を嘲笑っているのはド・ロレーヌ家の少年。彼に続き、他の学生も口うるさく何か言っているようだ。

「黙りなさい！初対面の方の両親を貶せと、あなたは両親にならなかったのですか？ミスタロレーヌ、あなたはそれでもトリステイン貴族ですか！誇りをもちなさい！」

つい口が出てしまったけれど、別に後悔はしていない。人の両親を侮辱するなんて、許せない行いだ。

「なんだと貴様！僕の家を伯爵家と知っての無礼か？今謝るならば許してやろう。さあ、謝りたまえ。」

「随分と偉そうな態度ですわね？ミスタ。あなたはロレーヌ伯爵の子供でしかないのに。」

そう。ここで偉そうにしている貴族はほぼ全員爵位をもっていない。貴族の息子でしかない。それを分らずに横暴な態度を取るものが多いのが現状なのだ。貴族というものも、随分と勘違いされているようだ。

「まあまあ、二人とも落ち着きなさい。ミスタバサには少々込み入った事情があるため、名を名乗ることが出来ないだけで、ご立派な両親をお持ちですよ、ミスタロレーヌ。それでは自己紹介の続きをはじめましょうか。それではミスタと言いかいをしていたそのミス。お願いします。」

「分かりました。皆さん、私はエリーザベト・ド・ルクセンブルクですわ。どうかお見知りおきくださいませ。」

くギーシュsideく

ルクセンブルク公爵家。

トリステインを建国をした始祖ブリミルの子を祖父に持つバルドウィン・ド・ルクセンブルク公が起こした家で、トリステイン王国初の公爵家だね。

その歴史は長くトリステイン王国の貴族の中では最古参なんだよ。代々宰相を輩出してきた名家だけど、500年前に王と意見を違い、宰相の地位を剥奪されたんだけど、王家に対する忠誠心は捨てずヒポグリフ隊を結成して、王家を代々守護してきた家系なんだ。

だけど16年前、ヒポグリフ隊の隊長であったジギスムント・ド・ルクセンブルク公が王家を襲撃したスクウェアメイジの集団から王を護って殉職なされてしまったんだ。

ジギスムント公の死を聞いて喪に服していた奥方のバルバラ・ツェリスカ様が自刃なされてしまった。

そうしてルクセンブルク家の血は絶えてしまったと思ったけれど、当時6歳になられた御息女がルクセンブルク家当主として異例な速さで襲名なされ、さらには国軍の中将にまで任命されているんだけど、彼女はエリーザベト・ド・ルクセンブルクと名乗った。16歳でルクセンブルクの名、ああブリミル様！ありがとう！ルクセンブルク卿の御息女と同じ学び舎で学ぶことが出来るなんて！

「何ニヤニヤしてるのよギーシュ！気味悪いわよ・・・」

モンモランシー！やめてくれよ！僕は感動に心を震わせているだけだよ！ああ！そんな目でみないでくれたまえ！

（ルイズ side）

終わったわね。あのロレーヌ家のヴィリエとかいうの。

エリーゼってご両親好きだからね。確かに、あんなに立派なご両親だもの、誇りたくもなるわね。

それにしても、今まで男共からちやほやされていい顔してたツエルプストーの乳女の驚いた顔！いい物みれたわね。あとでエリーゼにお礼を言わなきゃ！

（タバサ side）

驚いた。彼女があのだよらしいジョゼフに言われて監視対象になっている女性。

あの狂王が脅威に感じている女性だからどんな人かと思っていたけど、私と同じような少女だったとは。

それにしてもあのトリステイン貴族にお父様とお母様を貶された時私のために言葉を発してくれた。うれしかった。

威風堂々として、私と同じくらいの年とは思えない覇気。まるで、イーヴァルディの勇者のようだった。

くキュルケsideく

それにしても驚愕ね。トリステインだけじゃなく、ハルケギニア全
ての騎士の憧れとされる「騎士の鏡」ジギスムント様の娘がこの場
所にいるなんて。

ジギスムント様の存命中私の祖国ゲルマニアでは「トリステインに
ルクセンブルクあり」と言われていたけれど、ジギスムント様が亡
くなり、それ以降の貴族達の愚行、呆れたわ。ジギスムント様の死
を聞き涙を流したアルブレヒト三世陛下もお怒りになり、ゲルマニ
ア中の貴族達が集まる公な場所で「トリステインは歴史だけの国だ」
と仰られてからはゲルマニアではトリステインの評価は下がる一方
だったわ。

見知らぬ少女を助けるその気概、さすがはルクセンブルクの名を継
ぐだけはあるわね。

彼女と友人になれば私の微熱もよりいっそう燃え上がりそうだわ。
この三年間面白くなりそうね。

くヴィリエsideく

僕が名も名乗れぬ下賤な出自だと罵った少女を助けたのは、あのル
クセンブルクの名を持つ少女。

ああ、入学以前父上に口うるさく何度も言われていた「ルクセンブ
ルク公に粗相のないようにな！絶対だぞ！」と。

幼い頃から両親に引き合いに出されていたルクセンブルクの少女。

「ジギスムント卿の御息女ならこのくらい簡単だ」

「エリーザベト様がルクセンブルク公に襲名なされた、お前と同じ年なのに大したものだ。」

僕は父上に認めてもらいたかった。母上に褒めて欲しかった。だが何かと僕の邪魔をしてきたルクセンブルク。

いいだろう。エリーザベト・ド・ルクセンブルク。僕はお前に打ち勝ち父上や母上に証明してみせる。

お前よりも、僕は優秀だと！

（エリーゼ side）

私が名を名乗のると驚く者に、私を知っていたのか一礼をする者、なにやらガツポーズをし……ってこれはルイズね。

ニヤけた顔をする少年。……少し気味悪いわね。

ロレーヌ家の少年も最初は驚き、顔を青ざめていたが、意を決した顔になりこういった。

「エリーザベト・ド・ルクセンブルク！決闘だ！」

3

決闘。

貴族ではめったに行われないが、己のプライドを掛けた戦い。

平民では剣や槍などの武器を用い、貴族では魔法を行使して行われる。

だがここ、トリステイン魔法学院では貴族同士の決闘は禁止されている。

なので私はこう言った。

「良いでしょう。受けますわ。その決闘。」

（コルベール side）

貴族同士の決闘は禁止されているというのに、エリーザベト様は決闘を受けてしまわれた。

聡明なエリーザベト様ならば、そんな事とうに知っていらっしゃるのになぜ受けてしまわれたのか！

「二人とも、貴族同士の決闘は魔法学院では禁止されていますよ。」

「ええ、知っていますわ。ミスタコルベール。ですので、オールドオスマンにお伺いを立てたいので、ついてきてくださるかしら？」

エリーザベト様は何をお考えになっているのか、仕方なく私は彼女と共に学院長であるオールドオスマンの部屋へと向かった。

「オールドオスマン side」

「ミスロングビル。今年の一年生は君の目から見てどうかの？」

「そうですね、今年の生徒達も皆さん元気があってよろしいかと。それに加え、ヴァリエール家の三女にツェルプストー家の長女、なんとと言ってもルクセンブルク卿の忘れ形見であられるエリーザベト様がいらっしゃるので、何も心配はないかと思いますが。」

「そうじやろうか？ わしはなんだかこれからの三年間は厄介事が舞い込んできそうだと思うんじゃないか・・・」

何事もなく終わればいいんじゃないかのう。そうはさせてくれんようにで気が気でないんじゃないか。

「オールドオスマン。コルベールです。失礼いたします。」

「何事かね？ コルベール君。」

「それは私からご説明いたしますわ。オスマン卿。」

「これは、エリーザベト様。何か御用ですかな？」

「ええ、決闘の許可をしていただきたく参りました。」

「決闘ですか？魔法学院では貴族同士の決闘は禁止されているはずじゃが、理由を聞いても？」

「ええ、オスマン卿。貴族同士の決闘が禁止されているのは承知していますが、私はこの年ですでに公爵の位を持つ身です。幼い私に付け入ろうとする貴族も多くいるのですよ。この学院に在籍する生徒の親にも、ね。」

「それはジギスメント卿が御亡くなりになった時にわしも知っておりますが、それと決闘と何の関係がおりで？」

「関係あるのですよ。オスマン卿。あなたなら既に分かっていると思いますが、私は幼いと言ってもこの身は既に公爵。過小評価されてはいけないのです。公爵とは王家の血を引く存在。公爵家の者を過小評価するというのはその血と同じ血が流れる王家を軽く見るのと同じ同意。ならばどうしたらいいか？それは、示さなくてはいいのです。力を。」

「ほう。では、この決闘で魔法の力を示すのですかな？」

「ええ、他にもありますが、魔法の力を見ていただければ皆さんも私について軽く見る考えを改めるでしょう。」

「ふむ・・・深いお考えに恐縮いたしました。今回に限り、決闘を許可しましょう。ただし、立会い人をつける事と、決して相手を殺さないことを約束していただければ、ですけどな。」

「ええ、いいでしょう。このエリーザベト、ルクセンブルクの名に

誓いましょう。」

「ならば、許可いたします。立会い人として、わしとそのコルベール君、あとはギトー君を呼びましょう。時刻はいかがいたしますかな？」

「今すぐにも。」

「分かりました。ではコルベール君、ギトー君を連れてヴェストリの広場まで来なさい。」

くキュルケ side く

まさかトリステイン魔法学院に入学してすぐに決闘がみれるとは思っても見なかったわ。それもジギスムント様の娘の戦いが見れるだなんて。

相手は生徒達が噂していたけど、風のラインみたいね。ライン程度でエリートだなんて笑わせてくれるけど。

「諸君！私はヴィリエ・ド・ロレーヌだ。優秀な風メイジを多く排出してきたロレーヌ家の長男だ。今から私がこの風の力、ロレーヌの力をルクセンブルク卿にお見せしよう！」

ド・ロレーヌが宣言したわね。

さて、ジギスムント様の娘の力はいかほどかしら？

「私はエリーザベト・ド・ルクセンブルク。若輩ながら、公爵を名乗らせてもらっています。ミスタロレーヌが示すように私も示しましょう。トリステイン王国の王家と同じ血を引く公爵の力を。そして、このトリステインの力を。」

彼女はトリステイン王国国軍の中将をしているから、トリステインの力を示すって事は本当ね。

これだけ大仰な事を言った後で敗北したら、とんだ笑いものだけだ、彼女にはその力がある。なんていったってジギスムント様の人娘なんだから！

「それでは、両者準備はよろしいかの？では、始め！」

オールドオスマンの開始の合図を聞き、ド・ロレーヌは呪文を唱えているが、彼女は・・・なにもしていない！？貴族同士の決闘では魔法を用いて戦う。魔法とは呪文を唱えないと発動しないわ。それなのに、彼女は何を考えているのかしら？

ド・ロレーヌの呪文が完成し、放たれたのはウィンドブレイク、突風を巻き起こし相手を吹き飛ばす呪文ね。
まずは小手調べってところかしら？

それに対して彼女が取った行動は一つ。ウィンドブレイクを避けただけ。

ただそれだけなんだけれど、風の呪文を避けると言うのはものすごい事だ。

風の呪文と言うのは不可視の攻撃。それを避けるというのは相当戦いに慣れていなければ無理なのだけだ。

さすがはジギスムント様の娘ね。

「ミスタロレーヌ？それがあなたの風の力なのでしょうか？そんなものではないでしょう。あなたのお父様はもっと早く、もっと強力な呪文を放つことができますよ？」

「うるさい！だまれ！君はどうなんだ！何もしないでただ避けただけじゃないか！もしや、魔法が使えないのではないかね？」

「いいでしょう。そこまで言うならば示しましょう。私の力を。」

そう言うとき彼女は呪文を唱えた。

現れたのは10人のエリザベート。

偏在魔法！

偏在と言ったら風のスクウェアでないと行使できない力じゃない！

「では、いきましようか？ミスタロレーヌ。」

くキュルケsideendく

10人のエリザベートは各々に違う呪文を唱え始めた。

ヴィリエも始めは偏在に驚いていたが、同じく呪文を唱え始めた。

彼女が始めに打ったのは蒼いファイヤーボール。

蒼い火の玉が高速でヴィリエの足元に着弾し、轟音を上げて火柱が立った。足元の石垣はドロドロに融解してしまっていた。

それをみたヴィリエは顔を真っ青にして、逃げ出してしまった。

それでも彼女は魔法を打つのを止めない。

次に打った魔法は蒼いフレイムウォール。

蒼い炎の壁がヴィリエの逃げ場を断ち、囲まれてしまったヴィリエ。

フライの呪文で炎の壁を脱出したヴィリエを次に襲ったのは蒼のフレイムストーム。

蒼炎が嵐となってヴィリエを襲う。が、彼女は笑うとヴィリエに到達する前にフレイムストームを消した。

「どうしたのですか？ ミスタロレーヌ。ド・ロレーヌの力はそんなものなのですか？」

その言葉に怒り心頭のヴィリエは己の放てる中で最高のウィンドカッターを放つ。

不可視の刃が彼女の首を落とそうと迫る。

（貰った！）

そう思ったヴィリエだが、彼女の体に魔法が触れた途端。風の刃は蒼い炎に包まれ消失してしまった。

「それではそろそろ終わりにしましょうか？」

天使のような微笑を浮かべた彼女が告げたのは最終宣告。

10人のエリザベートが一斉に詠うように呪文を紡ぐ。一音一音が重なり合い、一つの魔法となった。

しかし彼女から魔法が放たれる事はなかった。

なぜなら、ヴィリエ・ド・ロレーヌが失神し、倒れてしまっていたから。

彼女は笑いながら「私の勝ちですね。」と呟いた。

呆気に取られていたオールドオスマンも彼女の言葉に正気になり、決闘の終了を宣言した。

決闘事件が終了し、魔法学院の学院長室
立会人を務めていたコルベール、ギトー、オスマンの三名が集まっ
ていた。

「オールドオスマン side」

「なんなんですか！あの魔法は！明らかに異常なまでの威力でしょ
う！」

ギトー君の気持ちも分かるがちと興奮しすぎじゃのう。うるさいわ
い。

「確かに、エリーザベト様は私と同じ火のメイジとお聞きしていま
したが、あの偏在や、蒼い炎については私も分かりかねますな。」

「そうだ偏在！偏在は風魔法を極めることでしか出来ない魔法のは
ず！それに10人もの数を僅かな詠唱でとは、明らかに異常ですぞ
！」

「それもそうじゃし、問題はあの蒼い炎と、最後にエリーザベト様
が唱えておった魔法じゃ。10人の偏在を用い行使する魔法。聞い
ただけでも身震いするわい。」

彼女の偏在あの威力の魔法を放つのじゃ、それが本体と10人が
一斉に行使する魔法ともなれば、たった一人で国が落とせそうじゃ
な。

「それに関しては火メイジの私ですら、分かりかねます。こればかりはご本人にお聞きしない事には・・・」

ううむ、エリーザベト様をお呼びして聞くしかないじやろうな。

「そうじゃな、ミスロングビル。エリーザベト様を学院長室までお連れしなさい。」

それにしてもルクセンブルクはやはり、トリステインの最終防壁じやろうな。あのような力があれば恐ろしくて攻め入る事もできんじやろう。

今回の決闘では諸外国の留学生も見ていたじやろうし、良い牽制になったのじやろうな。

「エリーザベト・ド・ルクセンブルク、お呼びにより参上いたしましたわ。オスマン卿。」

「御足労を掛けて申し訳ないですな、エリーザベト様。先ほどの決闘で行使した魔法について質問をしたいのじやが、よろしいじやろうか？」

「ええ、構いませんよ。」

「それではまずあの偏在についてお聞きしたい。あなた様は火のメイジでいらっしゃるはず、ですが風のスクウェアメイジでしか使う事のできない偏在魔法を使えたのはなぜですかな？」

「ああ、あれは火の偏在魔法です。」

「火の偏在ですと！そのような魔法は今まで聞いた事ありませんでしたが、どのような魔法で？」

「風に実態を持たせる風の偏在同様、火に実態を持たせただけの話ですよ。あまり構造としては風の偏在と変わりませんが、操作がとても難しいので、並大抵のメイジでは扱うことが出来ないでしょう。コルベール先生ほどの腕前があれば2体程は扱うことが出来るかもしれないですね。」

「ふむ、では次にあの蒼い炎についてお聞きしますが、よろしいかな？」

「良いですよ。火と言うのは赤い物だと皆さん思っていますが、あれは不完全な火なんです。本来火というものは完全に燃焼すると青に近づくものののですけれど、空気中には余分なものがたくさん漂っていて、それが邪魔をして不完全な燃え方をしてしまうのです。ならば、空気中の余分な物を取り除いて火をつけて上げれば、青くなるのですよ。」

「ふうむ、実に興味深いお話ですな。」

コルベール君も興味深々じゃな。ギトー君に至っては何がなんだかと言う顔をしておるが。

「ふむ、あいわかった。それでは最後に、最後に唱えていた魔法ですが、あれはいったいどのような魔法なのですかの？」

「ああ、それは実際に見た方が早いと思います。外も暗いですし、丁度いいかもしれませんね。なんでしたらミスロングビルも一緒にどうですか？綺麗なものが見れると思いますわ。」

（コルベール side）

エリーザベト様に言われて我々教師達とミスロングビル。それからエリーザベト様に付いてきたミスヴァリエールにミスツェルプストー、ミスタバサで学院の外にある平原にやってきたわけですが、エリーザベト様は綺麗なものと仰っていたが、いったいどのような魔法なのだろうか。

「それでは魔法の行使させていただきますわね。」

「エリーゼの魔法が見れるなんて、楽しみ！期待しているからね！」

そう言ってエリーザベト様は偏在を10人出した。

「これは火の魔法ですけど、スクウェアの魔法ではありませんわ。火属性を八つ掛け合わせて行うオクタゴンスペルです。」

オクタゴンスペルですと！？王家ではトライアングルメイジが二人合わさるとヘキサゴンスペルを行使できると言われていますが、王家の血！そうか、公爵家には王家の血が入っているからそのような事も可能なのですな！

「ルミエール・デ・ラ・ルーナ」

彼女がそう呟くと夜の帳が降り、暗くなっていた草原に天から光が差し込んだ。まるで、月の光のように。

「きれい・・・」

女性の誰かが呟いた次の瞬間、ものすごい轟音と熱風が襲い掛かった。

「こ、これは・・・」

私が目を向けたその先には、先ほどまで草原だった場所が焦土と化していた。その範囲はおよそ前方1000メートルは超えている。

「これがオクタゴンスペルですわ、皆様。」

にこりと微笑む彼女だったが、私達はただその魔法の威力に恐れを抱くだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9525t/>

ゼロのつかいま

2011年6月11日08時44分発行